〈共同研究〉

大谷大学図書館所蔵
パーリ語貝葉写本の文献的研究

研究代表者
吉　元　信　行

目　次

はじめに　吉元　信行
1．大谷大学図書館所蔵貝葉写本の概要と入手経路　長崎　法潤
2．大谷大学図書館所蔵貝葉写本一覧（断簡を含む）
吉元　信行・長崎　法潤
3．『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』の一部補遺・訂正
吉元　信行・長崎　法潤
4．大谷大学図書館所蔵貝葉写本の特色　吉元　信行
5．ビルマ文字版三蔵註釈文献——ṭīkā（復註）の一部と
ganthantara（諸雑典籍）、nissaya（逐語訳）——　池田　正隆
6．インド・東南アジアに伝わる羽衣説話
——スダナとマノーハラー——　田辺　和子
7．『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』に対する反響について　舟橋　智哉
付録
1．パーリ語刊本・大谷大学図書館所蔵貝葉写本対照表
2．大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本
“*PAÑÑĀSA-JĀTAKA*” と “Sisora-jātaka” について
3．大谷大学図書館所蔵貝葉写本 Surūpa-jātaka

はじめに

吉元信行

大谷大学図書館には、南方上座仏教の貝葉写本が多数蔵されており、本共同研究以前に我々研究員が中心となって編集したその目録『大谷大学図書館所蔵・貝葉写本目録』（大谷大学図書館編、1995年3月刊）が出版されてから3年が過ぎた。本学所蔵貝葉写本は、東南アジア地域で書写されたものであるが現地では散逸しかけている貴重な文献群であることが目録作成のための現地調査によって判明した。先般、本学よりこの目録が内外の専門家や研究機関に寄贈されたが、さっそく多数の反響が寄せられており（外国で本目録の書評が三篇発表された＝この翻訳を本報告7．で紹介する）、研究にこの貝葉写本を活用しようとする学外の研究者からの問い合わせが寄せられ始め、すでに学外者によってもこの貝葉写本を用いた研究がなされつつある。

ところで、この写本群は、入手経路も様々で、また、系統立てて蒐集されたものでもないため、学術的に資料的価値の高いものからそうでないものまで、玉石混淆であるといってもよい。中には、学界では切望されていながらまだ校訂出版されていない稀覯写本や、出版されていても校訂が不完全で、本写本との校合によりさらなる学術的成果の期待される貴重な写本、あるいは、今まで学界に報告されたこともないような未知の写本もいくつか存在する。

そこで、我々は、本学におけるパーリ学を専門とするスタッフとして、平成8年度「一般研究」により、いち早くその文献的研究に着手した結果、クメール・ビルマ・モン文字貝葉写本について、ほぼその大要を整理し得た。その研究テーマ及び経過について簡単に報告しておく。

1)研究分担：研究代表者：吉元信行、貝葉写本の資料的分類研究、東南アジア仏教文化における貝葉写本の役割、クメール文字貝葉写本の律部、論部の研究。2)研究員：長崎法潤（本学教授）、本学図書館所蔵貝葉写本将来経路の追跡的研究、クメール文字貝葉写本の経部の研究。3)嘱託研究員：池田正隆（大阪外大講師、1997年度より本学講師）、ビルマにおける貝葉写本流布状況調査、ビルマ文字・

モン文字貝葉写本の研究。4)研究補助員舟橋智哉(本学大学院博士課程)及び院生協力者数名：貝葉写本調査補助。

〈平成8（1996）年度〉

平成8年度の共同研究では、十数回の学内・学外での研究会や研究打合会を開催し、それによって次のような研究経過・成果及び次年度への課題を得た。

1．目録作成段階では不明であった貝葉写本の将来経路の一部が明らかになった。

2．クメール、ビルマ、モン文字貝葉写本の phuuk ごとの巻頭・巻末のローマナイズとそのワープロ入力（全体の半分を終了、後半は次年度に実施）。

3．貝葉写本のテキストの中で、PTS 版等に校訂出版されているものについて、刊本からの逆引き索引作成準備。この索引によって、刊本の校訂が不完全などの理由で写本の参見が必要となった場合、本学貝葉写本の該当部分との照合が容易になる。この作業は次年度に継続した。

4．重要な資料でありながら、まだローマ字校訂出版のなされていないテキストで、本学貝葉写本中にある『清浄道論註』（Paramatthamañjūsā）及び、校訂出版されているが、本学写本との照合のなされていない『パーリ仏教教義集成』（Sārasaṅgaha）の一部校訂・照合を行った結果、その読解に本学貝葉写本が特に有用であることが判明した。

5．東南アジア方面に流布しているジャータカの中で、“Paññāsa-jātaka” という文献群があり、ビルマ方面所伝のものが PTS より、“Zimme Paṇṇāsa” として校訂出版されている。本学の貝葉写本中にも “Paññāsa-jātaka” があるが、それとは全く伝承の異なったタイ方面所伝のもので、ビルマ所伝には含まれていない稀覯写本も存在する。このタイ所伝のジャータカは、一部を除いて、まだ校訂出版がなされていないので、本学貝葉写本が多くの研究課題を提供してくれることは確実である。

6．上記諸調査の段階で、先般出版された『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』の記載で修正・補遺すべきところがいくつか判明した。その内の2・3の点は下記印度学仏教学会で報告したが、その詳細を本紀要にまとめて掲載する（本報告3.）。

7．吉元・長崎・池田各研究員は北九州市「世界平和パゴダ」に調査のため出張した。同パゴダ所蔵の資料閲覧及びミャンマー政府仏教会派遣僧ウ・ヴィ

ジャーナンダ大僧正より多くの知見を得た。

8．1997年3月に、池田研究員は自費でミャンマーに調査に行き、本共同研究に多くの知見を提供した。特に、本学図書館に所蔵しないパーリ・テキストの刊本、また、未刊行のパーリ・テキストの多数の写本コピーを将来した（本報告5.）。

以上の成果の中間報告を、吉元と長崎が日本印度学仏教学会学術大会において共同発表し、その要旨が同学会誌上に掲載された（吉元信行・長崎法潤「大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本について」印度学仏教学研究45-2, pp. 931-925）。

〈平成9（1997）年度〉

平成9年度もその継続研究が認められたので、前年度の成果に基づいて、以下の研究作業を継続し、後述のようないくつかの成果を得ることができた。

1．本学パーリ語貝葉写本の出自及び将来経路の解明：この問題に関しては、すでに長崎研究員によって『貝葉写本目録』の解説において触れられているが、その未解決の部分をこの共同研究によって調査した。この研究の一環として、本研究プロジェクト一同は、1997年12月25日、本学貝葉写本の将来に関係があると見られるタイ将来の仏舎利を納めた名古屋市の覚王山日泰寺を訪問し、そこにおける貝葉写本を中心にした調査を行った。ここでは、パーリ学が専門の愛知学院大学教授前田恵学博士の指導と覚王山鷲見住職の説明を受けた。そして、覚王山には本学貝葉写本と酷似したパーリ七論の写本の一部が存在するものの、大谷大学にタイ王室より貝葉写本が将来されたのは、覚王山における仏舎利の将来とは同時ではないことが判明した。

2．貝葉目録における套ごとの巻頭・巻末文のローマナイズ作業を貝葉写本原本と照合しつつ継続し、クメール、ビルマ、モン文字の貝葉についてほぼ完成した。この成果は今後の研究に活用される。

3．全貝葉写本について、(1)PTSにもほぼ完璧な校訂本があって、本写本と対校の必要の少ないもの、(2)PTSの校訂が不完全で、本写本との対校によってその成果の期待されるもの、(3)PTS等にまだ校訂出版されていない新資料（稀覯写本）、(4)現地語など、パーリ語以外の言語で書かれていて、本学の現有スタッフでは研究の困難なもの、などの分類整理がほぼなされ、この成果を一覧表にした（本報告2.）。この一覧表は『大谷大学図書館所蔵・貝葉写本目録』のサマリー的役割を果たすこととなり、目録は高価で、専門の研究者すべてが所

持しているわけではないので、本研究紀要またはその抜刷を専門の研究者に広く配布して、本学貝葉写本活用のための手引きになるようにしたい。このことによって、上記(4)の本学スタッフでは研究の不可能な資料についても、学外の研究者による研究の道が開けてくるであろう。

4．上記3．(1)(2)の写本群について、PTS版等の刊本との対照表を作成した（本報告付録1．）。この対照表によって、刊本の不備を点検するにあたって、本学貝葉写本を容易に活用できるようになる。

5．上記2．(3)の稀覯資料の中で特に重要な資料の一部についてローマナイズ・解読研究を実施した。稀覯貝葉写本中、吉元が中心になって、タイ所伝の“Paññāsa-jātaka”のなかの“Surūpa-jātaka”のローマナイズ（本報告付録3．）と解読研究を完成した。また、研究協力者大上清は、“Sisora-jātaka”のローマナイズ・解読研究をなし、その成果を修士論文として大谷大学に提出した。その成果の一部はインターネット上で公開されつつある（http://web.kyoto-inet.or.jp/people/ohgami/baiyo.html）。

7．公開講演会の開催：タイ所伝のジャータカ関係貝葉写本の研究で業績のある田辺和子博士（東方研究会研究員）を招聘し、「東南アジアに伝わる羽衣説話――スダナとマノーハラー――」と題する公開講演会を実施し、あわせて博士より本共同研究について様々な知見を得た。この講演筆録を本報告6．として掲載する。

8．ビルマ文字註釈文献等の刊本及び稀覯写本コピーの収集：池田嘱託研究員はミャンマーの寺院を調査し、標記資料を収集し、本学図書館に収めた。また、未刊の復註文献について、そのコピーを将来し、整理製本した。

本研究は研究代表者及び次のメンバーの共同研究によってなされた。研究員：長崎法潤（本学教授）、嘱託研究員：池田正隆（本学講師）、研究補助員：舟橋智哉（本学大学院博士課程）、研究協力者：奥村浩基（本学大学院博士課程）、柏原信行（龍谷大学講師）、大上清（前本学大学院修士課程）、金光朋充（前本学大学院修士課程）、ミャ・ミャ・チー（本学大学院修士課程）ほか。

この共同研究により、本学図書館所蔵パーリ語貝葉写本が、パーリ仏教学及び東南アジア仏教文化研究に果たす役割が明らかになり、散逸しかけている貝葉写本を解明するという点もあわせて、学界を益することを期待する次第である。